

完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 愛知県名古屋市中区三の丸3丁目1-2
管理機関（代表の機関）名 愛知県
代表者名 教育長 飯田 靖

令和6年度マイスター・ハイスクール普及促進事業に係る完了報告書を、下記により提出します。

記

1. 基本情報

管理機関	(管理機関名) 愛知県
	(代表者職名) 教育長
	(代表者氏名) 飯田 靖
事業名	DX時代をリードする高度介護人材の育成 -愛知から始まる高校福祉の新潮流-
事業実施期間	契約日～令和7年3月31日
モデル	先進的取組 / 連携体制強化
連携体制を構築する 産業分野	福祉・介護分野
拠 点 校 名	愛知県立古知野高等学校 福祉科 (計 1 校)
連 携 予 定 の 産 業 界 等 名 (団体名・企業名等)	社会福祉法人愛生館、社会福祉法人貞徳会、公益社団法人愛知県理学療法士会、一般社団法人地域福祉活動協会、株式会社ケアコネクトジャパン、株式会社ビジョナリー、株式会社森津介護サービス、同朋大学、日本福祉大学、社会福祉法人江南市社会福祉協議会、江南中部地域包括支援センター

2. 事業概要等

(1) 産業界と専門高校の連携体制に関する申請者の課題

- ・今日の福祉・介護現場においては、DX推進による生産性向上や科学的裏付けに基づく質の高い介護の実践などが求められている。こうした中、介護福祉士を養成する福祉系高等学校では、産業界や関係機関と連携し、急速に進展する介護現場の変化に適応した専門性の高い教育活動の充実が課題となっている。
- ・高度化した産業社会で成果を上げるためには、新たな課題にも積極的に挑戦する心構えと、失敗してもそこで得た情報をフィードバックし、成功に導く粘り強さや強じんな心が必要である。本県の職業学科では、こうした資質・能力を育成するため、課題解決型の授業や競技会（コンテスト）等への挑戦を通して、探究力・創造力・課題解決能力等を育むとともに、課題解決に向け、他者と協調・協働して積極的にコミュニケーションする能力を育成する教育の充実が課題となっている。
- ・愛知県高等学校福祉教育研究会加盟校（18校）においては、各校が産業界との連携を図り、特色を生かした取り組みを実践しているものの、産業界との組織的かつ持続的な連携体制を構築するまでには至っていない。その背景には、教育現場と産業界とを結ぶネットワーク機能が不足していることや、先進的な取組をしていたとしても、域内の高等学校とその成果やノウハウが十分に共有できていないことなどが挙げられる。

(2) 事業概要

- ・古知野高等学校を拠点校とし、産業界等と連携・一体化した実践的な教育活動を推進し、その成果を域内の高等学校と共有することにより、県全体の福祉・介護業界の活性化に繋げていく。具体的な事業内容としては、産業実務家教員による福祉・介護現場におけるICT・IoTの活用に関する学習や科学的裏付けに基づく介護に関する学習を実施し、テクノロジーを活用する力、情報活用能力を育成する。
- ・今日の福祉・介護現場における課題（生産性向上や人材確保など）や、地域の福祉課題等について、生徒自らが課題解決に向けた方策を提案する課題解決型学習（KOCHINO PBL）を実践することにより、他者と協調・協働する力、課題解決能力を育成する。産業界や福祉機関からは専門人材をPBLアドバイザーとして招聘し、生徒へ直接指導・助言をいただく。
- ・産業実務家教員による授業については、公開授業日を設定することで、県内（外）の福祉担当教員が視察できる仕組みを作る。また、視察に訪れた福祉担当教員と産業実務家教員が意見交換できる場を設定することで、福祉を学ぶ高等学校と福祉・介護現場との新たな連携を創出し、県（全国）の福祉・介護業界全体の活性化に繋げる。

(3) 事業目的

事業実施により期待される成果等

●生徒の変化について（育成を目指す力）

ア テクノロジーを活用する力

介護分野における生産性向上を目指し、介護ロボットやICT機器等を安全かつ効果的に操作する力を育成する。また、ケアチームや他職種との情報共有や連携を円滑に行うことを目指し、電子介護記録等を活用する力を育成する。テクノロジーを活用することにより対象者の多様なニーズに対応し個別的で質の高いケアを提供することができる高度介護人材を育成する。

イ 情報活用能力

テクノロジーを活用する力だけでは、科学的裏付けに基づく介護を実践することはできない

い。収集した介護データ（食事摂取量、排泄リズム、睡眠リズムなど）を適切に分析し、対象者一人一人の状態に合わせた適切なケアを提案することができるよう、情報活用能力を育成する。

ウ 他者と協調・協働する力

介護現場では、各専門職が自分の領域の知識や技術を発揮しチームで業務を進めることにより、対象者への包括的なケアを実践している。本事業では、課題解決型学習を通して、他者と協調・協働するためのコミュニケーションスキルやリーダーシップを育成する。

エ 課題解決能力

複雑な課題が絡み合うDX時代では、課題の本質を見抜き、解決策を考え、課題を解決に導く力が求められる。本事業では、課題解決型学習を通して、「課題解決能力」を高める。

福祉・介護現場の課題や地域の福祉課題等の解決は決して容易なことではない。しかし、上手くいかなない場面にこそ学びがあり、チーム力を発揮することができる。試行錯誤を繰り返し、困難な状況をしなやかに乗り越えられる力（レジリエンス）を高めていく。

●産業界と専門高校の連携体制に関する変化について

- ・拠点校で実施された事業については、事業運営委員会場で評価・検証を行い事業の成果を明らかにする。成果については域内の高等学校等へ還元するとともに、産業界と連携するためのノウハウを共有する。これらの取組が足がかりとなり、域内の高等学校が産業界と新たに連携を図ったり、連携体制を強化したりすることを期待する。
- ・事業運営委員会において、本県における福祉・介護業界が目指すべき姿や求められる福祉・介護人材像についての展望を検討する。また、教育現場と産業界との連携協定等の仕組み作りなど、産業界とのこれからの連携体制について構想を具体化する。

（４）事業実施体制

管理機関	愛知県
拠点となる専門高校	愛知県立古知野高等学校
連携する産業界	
社会福祉法人貞徳会	産業実務家教員 1 名 1 年生「生活支援技術」 24 時間/年
株式会社ケアコネクトジャパン	産業実務家教員 1 名 1 年生「生活支援技術」 6 時間/年
株式会社森津介護サービス	産業実務家教員 1 名 2 年生「こころとからだの理解」 20 時間/年
同朋大学	産業実務家教員 3 名 2 年生「介護過程」 20 時間/年
社会福祉法人江南市社会福祉協議会	PBLアドバイザー 2 年生「介護福祉基礎」 10 時間/年
江南中部地域包括支援センター	PBLアドバイザー 2 年生「介護福祉基礎」 10 時間/年
公益社団法人愛知県理学療法士会	PBLアドバイザー 2 年生「介護福祉基礎」 10 時間/年
一般社団法人地域福祉活動協会	PBLアドバイザー 2 年生「介護福祉基礎」 10 時間/年
株式会社ビジョナリー	PBLアドバイザー 2 年生「介護福祉基礎」 6 時間/年
日本福祉大学	PBLアドバイザー 2 年生「介護福祉基礎」 4 時間/年
社会福祉法人愛生館	介護DXの施設見学 2 年生「生活支援技術」

●管理機関の役割について

- ・事業の管理機関として事務局機能を有し、拠点校を支援する。
- ・域内の高等学校に対して産業界と専門高校の連携体制に関する指導を行う。

(5) 事業の進捗管理、成果の検証、改善等の仕組み

意思決定機関である「事業運営委員会」を年2回（9月・1月）開催し、拠点校を中心とした事業の進捗状況を確認するとともに、事業の評価・検証を行う。また、事業実施機関として「事業推進委員会」を開催することにより、実務者間で事業改善に向けた具体的な方策を検討する。産学連携コーディネーターは両委員会に出席し、委員会間の意思疎通を円滑に進めることで事業改善等の課題に対して速やかに対応する。

●達成目標及び指標①

【分野1】科学的裏付けに基づく介護（EBC）の実践

本事業を始めとする学習活動全体で身に付いたと考えられる資質・能力について、以下の観点による評価アンケートを作成し、生徒・教員（各科目担当者及び産業実務家教員）に対して各年度終了時に実施する。アンケートは4段階【全くそう思わない・あまりそう思わない、ややそう思う、とてもそう思う】で評価を行い、生徒・教員の評価で【ややそう思う】以上が80%以上を目標とする。

<生徒評価アンケートの大項目>

○科学的裏付けに基づく介護（EBC）の実践

(1) 介護ICTに関する知識・技術の習得について

[1年生]

- ①利用者の状況に応じて適切な福祉機器を選択する力が身に付いた。
- ②福祉機器を使用する際の基本的な操作手順を正しく理解し、実行する力が身に付いた。
- ③福祉機器の安全操作の注意点を理解し、実践する力が身に付いた。

[2年生]

- ①介護ICTを活用する意義を理解し、それを説明できる力が身に付いた。
- ②介護ICTが利用者に与える影響を考え、適切な活用方法を提案する力が身に付いた。
- ③介護ICTの活用における課題や注意点を見つけ、改善策を考える力が身に付いた。

(2) 情報活用能力について

[1年生]

- ①科学的根拠に基づく介護を実践する意義を理解し、実際に考えられる力が身に付いた。
- ②どのようなデータが介護に生かせるかを考えられる力が身に付いた。
- ③自立支援介護がなぜ大切かを理解し、どのような支援が必要かを考えられる力が身に付いた。

[2年生]

- ①ケアデータを基に利用者の状況を正しく理解する力が身に付いた。
- ②ケアデータから利用者の体調や必要な支援を考える力が身に付いた。
- ③ケアデータを介護計画の立案に生かす力が身に付いた。

(3) 認知症ケアの実践力について

[2年生]

- ①認知症の方への適切なコミュニケーション方法を考え、実践する力が身に付いた。
- ②認知症の方の行動・心理症状（BPSD）に適切に対応する力が身に付いた。
- ③認知症状を軽減させるケアを考え、実践する力が身に付いた。

<教員評価アンケートの大項目>

○生徒の変化について

(1) 介護ICTに関する知識・技術

- ①生徒が、利用者の状況に応じて適切な福祉機器を選択する力を身につけたと感じる。
- ②生徒が、福祉機器を使用する際の基本的な操作手順を正しく理解し、実行できる力を発揮していると感じる。
- ③生徒が、介護 ICT を活用する意義を理解し、それを説明できる力を習得したと感じる。

(2) 情報活用能力

- ①生徒が、ケアデータを基に利用者の状況を正しく理解する力を身につけたと感じる。
- ②生徒が、ケアデータから利用者の体調や必要な支援を考える力を発揮していると感じる。

(3) 認知症ケアの実践力

- ①生徒が、認知症の方への適切なコミュニケーション方法を考え、実践する力を発揮していると感じる。
- ②生徒が、認知症の方の行動・心理症状（BPSD）に適切に対応する力を身につけたと感じる。

○教員自身の変化について

(1) 指導力の向上

- ①生徒の変化を観察し、科学的裏付けに基づく指導の重要性を実感した。
- ②介護 ICT の活用に関する知識や指導力が向上したと感じる。
- ③認知症の方への適切なコミュニケーション力を育てる指導方法について、新たな視点や工夫を得たと感じる。

(2) 教員としての意識の変化

- ①生徒の学びを支える中で、科学的裏付けに基づく介護の有効性を強く感じた。
- ②他の教員や産業界との連携を通じて、自身の指導方法に新たな視点が加わったと感じる。

事業内容	達成目標
①介護×ICTの実践-テクノロジーの善き使い手に-	(1) 介護 ICT に関する知識・技術の習得について [1 年生] ①利用者の状況に応じて適切な福祉機器を選択することができる。 ②福祉機器を使用する際の基本的な操作手順を正しく理解し、実行することができる。 ③福祉機器の安全操作の注意点を理解し、実践することができる。 [2 年生] ①介護 ICT を活用する意義を理解し、それを説明することができる。 ②介護 ICT が利用者に与える影響を考え、適切な活用方法を提案することができる。 ③介護 ICT の活用における課題や注意点を見つけ、改善策を考えることができる。
②科学的介護の実践-データを活用した介護過程の展開-	[1 年生] ①科学的根拠に基づく介護を実践する意義を理解し、実際に考えられる。 ②どのようなデータが介護に生かせるかを考えられる。 ③自立支援介護がなぜ大切かを理解し、どのような支援が必要かを考えられる。 [2 年生] ①ケアデータを基に利用者の状況を正しく理解することができる。 ②ケアデータから利用者の体調や必要な支援を考えることができる。 ③ケアデータを介護計画の立案に生かすことができる。
③認知症ケア最前線-科学的アプローチで症状改善-	①認知症の方への適切なコミュニケーション方法を考え、実践することができる。

	②認知症の方の行動・心理症状（BPSD）に適切に対応することができる。 ③認知症状を軽減させるケアを考え、実践することができる。
--	---

・現時点での数値

＜生徒評価アンケートの大項目＞

(1) 介護ICTに関する知識・技術の習得について

〔1年生〕

①利用者の状況に応じて適切な福祉機器を選択する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
19%	62%	16%	3%

②福祉機器を使用する際の基本的な操作手順を正しく理解し、実行する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
24%	54%	16%	6%

③福祉機器の安全操作の注意点を理解し、実践する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
16%	62%	19%	3%

〔2年生〕

①介護ICTを活用する意義を理解し、それを説明できる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
0%	60%	34%	6%

②介護ICTが利用者に与える影響を考え、適切な活用方法を提案する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
16%	44%	34%	6%

③介護ICTの活用における課題や注意点を見つけ、改善策を考える力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
6%	63%	25%	6%

(2) 情報活用能力について

〔1年生〕

①科学的根拠に基づく介護を実践する意義を理解し、実際に考えられる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
10%	68%	22%	0%

②どのようなデータが介護に生かせるかを考えられる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
22%	48%	30%	0%

③自立支援介護がなぜ大切かを理解し、どのような支援が必要かを考えられる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
35%	59%	3%	3%

〔2年生〕

①ケアデータを基に利用者の状況を正しく理解する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
25%	50%	22%	3%

②ケアデータから利用者の体調や必要な支援を考える力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
25%	53%	19%	3%

③ケアデータを介護計画の立案に生かす力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
22%	53%	16%	9%

(3) 認知症ケアの実践力について

[2年生]

①認知症の方への適切なコミュニケーション方法を考え、実践する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
16%	72%	12%	0%

②認知症の方の行動・心理症状（BPSD）に適切に対応する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
22%	56%	19%	3%

③認知症状を軽減させるケアを考え、実践する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
16%	47%	34%	3%

<教員評価アンケートの大項目>

○生徒の変化について

(1) 介護ICTに関する知識・技術

①生徒が、利用者の状況に応じて適切な福祉機器を選択する力を身につけたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
20%	80%	0%	0%

②生徒が、福祉機器を使用する際の基本的な操作手順を正しく理解し、実行できる力を発揮していると感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
20%	80%	0%	0%

③生徒が、介護ICTを活用する意義を理解し、それを説明できる力を習得したと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
0%	100%	0%	0%

(2) 情報活用能力

①生徒が、ケアデータを基に利用者の状況を正しく理解する力を身につけたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
0%	100%	0%	0%

②生徒が、ケアデータから利用者の体調や必要な支援を考える力を発揮していると感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

(3) 認知症ケアの実践力

①生徒が、認知症の方への適切なコミュニケーション方法を考え、実践する力を発揮していると感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
0%	100%	0%	0%

②生徒が、認知症の方の行動・心理症状（BPSD）に適切に対応する力を身につけたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
20%	80%	0%	0%

○教員自身の変化について

(1) 指導力の向上

①生徒の変化を観察し、科学的裏付けに基づく指導の重要性を実感した。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

②介護 ICT の活用に関する知識や指導力が向上したと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
20%	80%	0%	0%

③認知症の方への適切なコミュニケーション力を育てる指導方法について、新たな視点や工夫を得たと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

(2) 教員としての意識の変化

①生徒の学びを支える中で、科学的裏付けに基づく介護の有効性を強く感じた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

②他の教員や産業界との連携を通じて、自身の指導方法に新たな視点が加わったと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	20%	20%	0%

●達成目標及び指標②（※数値や数量で表すことができる定量的指標が望ましい）

【分野2】課題解決型学習（KOCHINO PBL）の推進

以下の観点による評価アンケートを作成し、生徒・教員（各科目担当者及び産業実務家教員）に対して各年度終了時に実施する。アンケートは4段階【全くそう思わない・あまりそう思わない、ややそう思う、とてもそう思う】で評価を行い、生徒・教員の評価で【ややそう思う】以上が80%以上を目標とする。

＜生徒評価アンケートの大項目＞

○課題解決能力の向上について

- ①課題解決に必要な情報を見つけて整理する力が身に付いた。
- ②課題解決のために、他者からの意見やアドバイスを取り入れる力が身に付いた。
- ③課題解決までの手順（見通し）を考えて進める力が身に付いた。

○コミュニケーションスキルの向上について

- ①他者の意見を尊重し、前向きに対話をすすめる力が身に付いた。
- ②自分の意見を他者に分かりやすく伝える力が身に付いた。
- ③チーム内の意見をまとめる力が身に付いた。

○リーダーシップの向上について

- ①目標を達成するために、自分から率先して行動する力が身に付いた。
- ②チームメンバーを積極的にサポートする力が身に付いた。
- ③問題が起きたときに、冷静に考えて提案する力が身に付いた。

○レジリエンスの向上について

- ①困難な状況に直面した際、落ち着いて対応する力が身に付いた。
- ②失敗しても、次に向けて前向きに行動する力が身に付いた。
- ③自分の感情をコントロールする力が身に付いた。
- ④困難な状況に直面した際、周囲をうまく頼る力が身に付いた。

＜教員評価アンケートの大項目＞

○生徒の変化について

(1) 課題解決能力の向上について

- ①生徒が、課題解決に必要な情報を見つけて整理する力を身に付けたと感じる。
- ②生徒が、課題解決のために、他者からの意見やアドバイスを取り入れる力を身に付けたと感じる。
- ③生徒が、課題解決までの手順（見通し）を考えて進める力を身に付けたと感じる。

(2) コミュニケーションスキルの向上について

- ①生徒が、他者の意見を尊重し、前向きに対話をすすめる力を身に付けたと感じる。
- ②生徒が、自分の意見を他者に分かりやすく伝える力を身に付けたと感じる。
- ③生徒が、チーム内の意見をまとめる力を身に付けたと感じる。

(3) リーダーシップの向上について

- ①生徒が、目標を達成するために、自分から率先して行動する力を身に付けたと感じる。
- ②生徒が、チームメンバーを積極的にサポートする力を身に付けたと感じる。
- ③生徒が、問題が起きたときに、冷静に考えて提案する力を身に付けたと感じる。

(4) レジリエンスの向上について

- ①生徒が、困難な状況に直面した際、落ち着いて対応する力を身に付けたと感じる。
- ②生徒が、失敗しても、次に向けて前向きに行動する力を身に付けたと感じる。
- ③生徒が、自分の感情をコントロールする力を身に付けたと感じる。
- ④生徒が、困難な状況に直面した際、周囲をうまく頼る力を身に付けたと感じる。

○教員自身の変化について

(1) 指導力の向上

- ①生徒の変化を観察し、課題解決型学習の重要性を実感した。
- ②課題解決型学習に関する知識や指導力が向上したと感じる。

(2) 教員としての意識の変化

- ①生徒の学びを支える中で、課題解決型学習の有効性を強く感じた。
- ②他の教員や産業界との連携を通じて、自身の指導方法に新たな視点が加わったと感じる。

事業内容	達成目標
①人と人との「つながり」を実感できる地域づくり-共に生きる力を育む-	(1) 課題解決能力の向上について ①課題解決に必要な情報を見つけて整理することができる。 ②課題解決のために、他者からの意見やアドバイスを取り入れることができる。 ③課題解決までの手順（見通し）を考えて進めることができる。
②福祉・介護の魅力発信-THINKER to DOER-	(2) コミュニケーションスキルの向上について ①他者の意見を尊重し、前向きに対話をすすめることができる。 ②自分の意見を他者に分かりやすく伝えることができる。 ③チーム内の意見をまとめることができる。
③元気で笑顔あふれるまちに-高校生考案の健康づくり	(3) リーダーシップの向上について ①目標を達成するために、自分から率先して行動することができる。 ②チームメンバーを積極的にサポートすることができる。 ③問題が起きたときに、冷静に考えて提案することができる。 (4) レジリエンスの向上について ①困難な状況に直面した際、落ち着いて対応することができる。 ②失敗しても、次に向けて前向きに行動することができる。 ③自分の感情をコントロールすることができる。 ④困難な状況に直面した際、周囲をうまく頼ることができる。

・現時点での数値

<生徒評価アンケートの大項目>

○課題解決能力の向上について

①課題解決に必要な情報を見つけて整理する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
10%	53%	31%	6%

②課題解決のために、他者からの意見やアドバイスを取り入れる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
25%	50%	19%	6%

③課題解決までの手順（見通し）を考えて進める力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
9%	47%	38%	6%

○コミュニケーションスキルの向上について

①他者の意見を尊重し、前向きに対話をすすめる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
25%	69%	6%	0%

②自分の意見を他者に分かりやすく伝える力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
10%	56%	25%	9%

③チーム内の意見をまとめる力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
19%	34%	44%	3%

○リーダーシップの向上について

①目標を達成するために、自分から率先して行動する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
6%	41%	34%	19%

②チームメンバーを積極的にサポートする力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
16%	44%	28%	12%

③問題が起きたときに、冷静に考えて提案する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
10%	50%	31%	9%

○レジリエンスの向上について

①困難な状況に直面した際、落ち着いて対応する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
6%	47%	38%	9%

②失敗しても、次に向けて前向きに行動する力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
19%	47%	28%	6%

③自分の感情をコントロールする力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
25%	50%	19%	6%

④困難な状況に直面した際、周囲をうまく頼る力が身に付いた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
19%	53%	25%	3%

<教員評価アンケートの大項目>

○生徒の変化について

(1)課題解決能力の向上について

①生徒が、課題解決に必要な情報を見つけて整理する力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

②生徒が、課題解決のために、他者からの意見やアドバイスを取り入れる力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
80%	20%	0%	0%

③生徒が、課題解決までの手順（見通し）を考えて進める力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

(2)コミュニケーションスキルの向上について

①生徒が、他者の意見を尊重し、前向きに対話をすすめる力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

②生徒が、自分の意見を他者に分かりやすく伝える力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
80%	20%	0%	0%

③生徒が、チーム内の意見をまとめる力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

(3) リーダーシップの向上について

①生徒が、目標を達成するために、自分から率先して行動する力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

②生徒が、チームメンバーを積極的にサポートする力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

③生徒が、問題が起きたときに、冷静に考えて提案する力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

(4) レジリエンスの向上について

①生徒が、困難な状況に直面した際、落ち着いて対応する力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

②生徒が、失敗しても、次に向けて前向きに行動する力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
40%	60%	0%	0%

③生徒が、自分の感情をコントロールする力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

④生徒が、困難な状況に直面した際、周囲をうまく頼る力を身に付けたと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

○教員自身の変化について

(1) 指導力の向上

①生徒の変化を観察し、課題解決型学習の重要性を実感した。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
80%	20%	0%	0%

②課題解決型学習に関する知識や指導力が向上したと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

(2) 教員としての意識の変化

①生徒の学びを支える中で、課題解決型学習の有効性を強く感じた。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
80%	20%	0%	0%

②他の教員や産業界との連携を通じて、自身の指導方法に新たな視点が加わったと感じる。

とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
60%	40%	0%	0%

●達成目標及び指標③：産業界と専門高校の連携体制について

評価アンケートを作成し、生徒・教員（各科目担当者）に対して各年度終了時に実施する。

<生徒評価アンケートの項目>

- (1) 産業界等との連携を通じて、実践的な知識や技術を学ぶことができた。
- (2) 産業界等との連携を通じて、自分のスキルや知識の向上を実感することができた。
- (3) 産業界等との連携は、自分の将来像や目標を明確にするきっかけになった。

<教員評価アンケートの項目>

- (1) 産業界との連携を通じて、生徒が実践的な知識や技術を学んでいると感じる。
- (2) 産業界との連携を通じて、生徒が自分のスキルや知識が向上したと感じる。
- (3) 産業界との連携が、生徒の将来像や目標を考えるきっかけになったと感じる。

・現時点での数値

<生徒評価アンケートの項目>

- (1) 産業界等との連携を通じて、実践的な知識や技術を学ぶことができた。

とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
12%	57%	28%	3%

- (2) 産業界等との連携を通じて、自分のスキルや知識の向上を実感することができた。

とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
16%	54%	26%	4%

- (3) 産業界等との連携は、自分の将来像や目標を明確にするきっかけになった。

とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
22	52	22	4

<教員評価アンケートの項目>

- (1) 産業界との連携を通じて、生徒が実践的な知識や技術を学んでいると感じる。

とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
60%	40%	0%	0%

- (2) 産業界との連携を通じて、生徒が自分のスキルや知識が向上したと感じる。

とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
40%	60%	0%	0%

- (3) 産業界との連携が、生徒の将来像や目標を考えるきっかけになったと感じる。

とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
40%	60%	0%	0%

(6) 成果発信の取組

- ・本校ホームページにマイスター・ハイスクールの進捗状況が分かるページを作成し、取組の様子や成果について発信する。
- ・本校福祉科公式 instagram（インスタグラム）を通じて、取組の様子や成果についてリアルタイムで発信する。
- ・愛知県高等学校福祉教育研究会（7月・2月）の場で、事業の進捗状況について報告する。
- ・全国福祉高等学校長会と連携し、全国で福祉を学ぶ高等学校等に対して報告書の送付や校長会ホームページへの掲載などを通して取組の成果を発信する。
- ・事業運営委員会を通じて県の福祉・介護業界（愛知県介護福祉士会、愛知県老人福祉施設協議会等）に対して事業の成果を発信する。
- ・FUKUSHI FES（福祉を学ぶ高校生が普段の取組や活動の様子を発表する機会）を研究成果中間報告会の場と位置付け、拠点校の生徒が事業の取組について発表することで、成果を域内の高等学校に還元する。
- ・産業実務家教員による授業について、公開授業日を設定することで、県内の福祉担当教員

が視察できる仕組みを作る。また、視察に訪れた福祉担当教員と産業実務家教員が意見交換できる場を設定することで、事業の取組を横展開する。

3. 令和6年度実績

(1) 事業運営委員会の構成

氏名	所属・職	役割
櫻井 敬三	愛知県福祉局・高齢福祉課長	県高齢福祉行政の立場から指導・助言
服部 麻美子	愛知県教育委員会高等学校教育課・課長補佐	県産業教育の立場から指導・助言
下山 久之	一般社団法人愛知県介護福祉士会・会長 (同朋大学教授)	職能団体の立場から指導・助言
伊藤 公一	一般社団法人愛知県老人福祉施設協議会・大会企画委員 (社会福祉法人弥富福祉会 特別養護老人ホーム輪中の郷・施設長)	施設運営の立場から指導・助言
内田 吉信	社会福祉法人愛知県社会福祉協議会・福祉人材センター所長	福祉人材確保の立場から指導・助言
小林 洋司	日本福祉大学・准教授	学術機関の立場から指導・助言
牛田 篤	同朋大学・准教授	学術機関の立場から指導・助言
鷺見 俊樹	社会福祉法人サン・ビジョン 介護老人保健施設フラワーコート江南・副施設マネジャー	介護現場の立場から指導・助言
川口 永理	愛知県立古知野高等学校・校長	座長
岡 しおり	産学連携コーディネーター	事業全体のコーディネート

事業運営委員会が本事業において果たす役割

- ・年2回（9月・1月）開催し、拠点校を中心とした事業の進捗状況を確認するとともに、事業の評価・検証を行う。
- ・本県における福祉・介護業界が目指すべき姿や求められる福祉・介護人材像についての展望を検討する。また、教育現場と産業界との連携協定等の仕組み作りなど、産業界とのこれからの連携体制について構想を具体化する。

(2) 事業運営委員会における実績

- ア 第1回事業運営委員会（9月）
- ア）マイスター・ハイスクール・ビジョンの具現化に向けた事業内容の確認
 - イ）産業実務家教員・PBLアドバイザーによる授業計画・指導内容の確認
 - ウ）評価アンケートの小項目・設問についての確認
 - エ）本県におけるこれからの福祉・介護業界の展望や産業界との連携体制についての協議
 - ①（意見交換）
- イ 第2回事業運営委員会（1月）
- ア）事業の進捗状況確認
 - イ）産業実務家教員・PBLアドバイザーによる授業の進捗状況の確認・検証
 - ウ）評価アンケート結果の考察
 - エ）評価アンケートを基に、今年度の事業の成果と課題把握及び改善策の検討

- ※拠点校と産業界との円滑な連携・事業推進を図るため、事業推進委員会【事業実施機関】を設置する。

氏名	所属・職
川口 永理	愛知県立古知野高等学校・校長
岡 しおり	産学連携コーディネーター
藤原 孝之	株式会社ケアコネクトジャパンツナグ課・次長
管田 真大	株式会社森津介護サービス・ホーム長
榊原 瑞恵	社会福祉法人貞徳会ガーデンハウス今伊勢・施設長
牛田 篤	同朋大学・准教授
小森 詩織	社会福祉法人江南市社会福祉協議会・福祉活動専門員
大森 美穂	江南中部地域包括支援センター・センター長
後藤 俊	江南市介護保険課介護予防グループ・主査
高木 諒	愛知県立古知野高等学校福祉科・教諭 ※他教諭 4 名

事業推進委員会が本事業において果たす役割

産業実務家教員や地域の福祉機関・団体、拠点校の教員などが実務者間で事業実施や改善に向けた具体的な方策を検討する。また、拠点校と産業界・地域との連携について協議し事業推進の在り方を検討・協議する。

[illegible]

＜詳細＞

- ・事業運営委員会と事業推進委員会については、年2回の実施とするが、事業運営委員会を先に実施し、事業運営委員会での議論を事業推進委員会に反映させる。
- ・各事業については、年次進行ではなく、令和6年度2年生についても、2年生で実施する事業の対象とする。
- ・3月に実施されるFUKUSHI FESを研究成果中間報告会として位置付ける。

＜達成目標＞

- ・各事業の実践にあたっては、産業実務家教員やPBLアドバイザーとの連携体制を確立し、取組を進める。
- ・産学連携コーディネーターを中心に事業全体の基盤を確立する。
- ・ホームページやSNSを活用して事業の成果を発信する。また、公開授業の実施等により、取組を横展開する。

＜目標達成状況＞（アンケート結果より）

【分野1】科学的裏付けに基づく介護（EBC）の実践

＜生徒評価アンケート＞

■ 達成（80%以上）

- ・「利用者の状況に応じて適切な福祉機器を選択する力が身に付いた」：81%
- ・「自立支援介護がなぜ大切かを理解し、どのような支援が必要かを考えられる力が身に付いた」：94%
- ・「認知症の方への適切なコミュニケーション方法を考え、実践する力が身に付いた」：88%

■ やや未達（70～79%）

- ・「福祉機器を使用する際の基本的な操作手順を正しく理解し、実行する力が身に付いた」：78%
- ・「福祉機器の安全操作の注意点を理解し、実践する力が身に付いた」：78%
- ・「科学的根拠に基づく介護を実践する意義を理解し、実際に考えられる力が身に付いた」：78%
- ・「どのようなデータが介護に生かせるかを考えられる力が身に付いた」：70%
- ・「ケアデータから利用者の体調や必要な支援を考える力が身に付いた」：78%
- ・「ケアデータを基に利用者の状況を正しく理解する力が身に付いた」：75%
- ・「ケアデータを介護計画の立案に生かす力が身に付いた」：75%
- ・「認知症の方の行動・心理症状（BPSD）に適切に対応する力が身に付いた」：78%

■ 未達（69%以下）

- ・「介護ICTを活用する意義を理解し、それを説明できる力が身に付いた」：60%
- ・「介護ICTが利用者に与える影響を考え、適切な活用方法を提案する力が身に付いた」：60%
- ・「介護ICTの活用における課題や注意点を見つけ、改善策を考える力が身に付いた」：69%
- ・「認知症状を軽減させるケアを考え、実践する力が身に付いた」：63%

＜教員評価アンケート＞

■ 達成（80%以上）

- ・生徒の福祉機器・ICT・ケアデータ・認知症ケアの習得に関する全項目：100%
- ・教員自身の「指導力の向上」に関する全項目：100%
- ・「意識の変化」に関する全項目：80%以上

【分野２】課題解決型学習（KOCHINO PBL）の推進

＜生徒評価アンケート＞

■ 達成（80%以上）

- ・「他者の意見を尊重し、前向きに対話をすすめる力が身に付いた」：94%

■ やや未達（70～79%）

- ・「他者からの意見やアドバイスを取り入れる力が身に付いた」：75%
- ・「自分の感情をコントロールする力が身に付いた」：75%
- ・「困難な状況に直面した際、周囲をうまく頼る力が身に付いた」：72%

■ 未達（69%以下）

- ・「課題解決に必要な情報を見つけて整理する力が身に付いた」：63%
- ・「課題解決までの手順（見通し）を考えて進める力が身に付いた」：56%
- ・「自分の意見を他者に分かりやすく伝える力が身に付いた」：66%
- ・「チーム内の意見をまとめる力が身に付いた」：53%
- ・「目標を達成するために、自分から率先して行動する力が身に付いた」：47%
- ・「チームメンバーを積極的にサポートする力が身に付いた」：60%
- ・「問題が起きたときに、冷静に考えて提案する力が身に付いた」：60%
- ・「困難な状況に直面した際、落ち着いて対応する力が身に付いた」：53%
- ・「失敗しても、次に向けて前向きに行動する力が身に付いた」：66%

＜教員評価アンケート＞

■ 達成（80%以上）

- ・課題解決能力・コミュニケーションスキル・リーダーシップ・レジリエンスに関する生徒の変化に関する全項目：100%
- ・教員自身の「指導力の向上」「意識の変化」に関する全項目：100%

【産業界と専門高校の連携体制について】

＜生徒評価アンケート＞

■ やや未達（70～79%）

- ・「実践的な知識や技術を学ぶことができた」：69%
- ・「自分のスキルや知識の向上を実感することができた」：70%
- ・「自分の将来像や目標を明確にするきっかけになった」：74%

＜教員評価アンケート＞

■ 達成（80%以上）

- ・全ての設問において 100%

＜成果及び次年度以降の課題＞（教員・生徒アンケートより）

1 成果

【分野１：科学的裏付けに基づく介護（EBC）の実践】

福祉機器や介護 ICT に関する基本的な知識や技術の習得が着実に進んでいることが明らかとなった。特に１年生および教員の評価において、福祉機器の選択や操作、安全管理に関する理解度が高く、いずれも肯定的評価が８割を超えている。教員は、生徒が授業で学んだ内容を実行に移す力を発揮していると感じており、授業内容の

実効性の高さがうかがえる。

また、認知症ケアに関する実践的な力についても成果が見られた。生徒からは、認知症の方への適切なコミュニケーションを考え実践する力が身に付いたという回答が9割近くに達しており、教員からの評価もすべて肯定的であった。日常的な演習や実習が効果的に機能しているといえる。

さらに、自立支援介護の意義についての理解も深まっている。1年生の回答では、自立支援の重要性を理解し、どのような支援が求められるかを考える力が育っていることが示され、9割を超える高評価が得られている。

加えて、教員自身にも顕著な変化が見られた。指導力や指導観の変化に関するすべての設問で肯定的な回答が得られており、教員の専門性の向上が確認された。特に、科学的根拠に基づく指導の重要性や介護 ICT 指導力の向上を実感している教員が多く、習得した専門性を今後の教育活動に生かしていきたい。

【分野2：課題解決型学習（KOCHINO PBL）の推進】

他者との対話しながら学ぶ姿勢の育成が進んでおり、生徒の多くが「他者の意見を尊重し、前向きに対話を進める力が身に付いた」と回答している。教員からの評価においても、チーム内で意見をまとめる力や、自己の意見を表現する力について高い評価が得られており、PBL の取組を通じて協働的な学びや対話的な態度が育成されていることがうかがえる。

課題解決に向けた意欲や、手順を考えて行動する力も一定の成果を示している。教員は、生徒が他者の意見や助言を取り入れる力や、見通しを立てて課題に取り組む力を身に付けていると実感しており、指導方法が確立しつつある様子がうかがえる。

また、教員自身においても指導力や意識の変化が見られた。課題解決型学習の有効性を実感し、自らの知識や指導力が向上したとする回答がすべての項目で 100%に達しており、実践的な指導力が育まれていることが分かる。

【産業界と専門高校の連携体制について】

産業界との連携活動については、教員側から特に高い評価が得られている。生徒が実践的な知識や技術を学んでいることを実感しており、スキルや知識の向上、さらには将来像や目標形成への寄与についても全項目で肯定的な評価が示された。これらの結果から、産業界との連携が教育的に非常に有効であるという認識が教員間で広がっていることがわかる。

一方で、生徒側の評価では、連携による大きな変化というよりは、少しずつ気づきを得る段階にあると見受けられた。将来像や目標の明確化につながったとする回答は全体の 74%にとどまっており、じわりと意識が高まりつつある状況がうかがえる。

2 次年度以降の課題

【分野1：科学的裏付けに基づく介護（EBC）の実践】

2年生において、介護 ICT に対する応用的な活用力の習得が十分でないことが課題として浮かび上がった。ICT の意義や影響を説明する力、利用者への適切な活用方法を提案する力、課題を見つけ改善策を考える力はいずれも肯定的回答が7割を下回っており、知識の定着には至っているものの、実践的な応用には結び付いていないことが明らかである。今後は、演習や事例検討、グループ討議などを通じて、ICT の活用力を深めていく必要がある。

また、情報活用能力、特にケアデータをもとにした支援計画の立案においても課題が見られた。必要な支援を考える力や、介護計画に活かす力はいずれも 70%台にとどまり、データを「考える」「活かす」という段階にまだ十分達していない。ICT ツールを活用した演習や模擬事例に基づいた計画立案トレーニングの導入が求められる。

さらに、認知症ケアにおいては、BPSD 対応に関しては一定の成果が得られているものの、認知症状の軽減を目的としたケアの実践力は依然として課題が残る。本人の視点に立った支援や、環境面からのケアアプローチなど、多角的な視点を養う学習機会の充実が必要である。

教員間や産業界との連携については、「新たな指導視点を得たと感じる」との回答が他項目に比べてやや低く、連携の質的な深まりが今後の課題である。外部講師との指導方法に関する対話の場や、実践的な情報交換の機会を計画的に設けることが望まれる。

【分野 2：課題解決型学習（KOCHINO PBL）の推進】

生徒の主体性やリーダーシップに関しては、全体としてばらつきが見られた。自分から率先して行動する力や、チームを支援する力、冷静に提案する力などに関する評価は 6 割前後にとどまっており、自発的に動ける学習者の育成には至っていない状況である。今後は役割交代や個人評価シートなどを活用し、個人の成長や取り組みを可視化する工夫が求められる。

課題解決のスキルについても定着に時間を要しており、情報を収集・整理する力や、課題解決の見通しを立てる力など、PBL の基本スキルに関しても肯定的評価は 6 割未満であった。導入初期における段階的な支援や思考ツールの活用、学習プロセスの構造化が必要とされる。

自己表現力や内省力の面でも課題が残る。他者に意見を分かりやすく伝える力や、チーム内で意見をまとめる力はいずれも評価が低く、場に応じた表現力や相手意識の育成が不十分である。発表・振り返り・記録などのアウトプット活動の設計を見直す必要がある。

さらに、レジリエンス、いわゆる非認知能力の伸びについても十分とはいえず、失敗後の行動や感情コントロール、周囲に助けを求める力といった項目において、6～7 割程度の肯定的評価にとどまっている。挑戦や失敗を前向きにとらえる力を育てるために、振り返りの質を高める仕掛けやポートフォリオの導入、感情の可視化といった取り組みの導入が求められる。

【産業界と専門高校の連携体制について】

産業界との連携に関して、生徒側の実感が教員と比較して相対的に低く、その差が課題として浮き彫りとなった。実践的な知識や技術の習得、スキルの向上、将来像の明確化に関する評価はいずれも 7 割前後で推移しており、学びの成果を自ら言語化できる機会が不足していることが背景にあると考えられる。

体験活動そのものは実施されているものの、事前学習や振り返り、記録、フィードバックといった学習設計が不十分である点も課題である。今後は、連携の目的を明確にした事前・事後の学習設計の見直しや、成果を発信する機会の創出が求められる。

また、産業界との接点が生徒の将来像に直結していないという点も改善の余地がある。学年間をまたいで継続的にキャリア形成を支援する仕組みとして、ポートフォリオの活用などを検討する必要がある。

（４）管理機関における取組実績

- ・事業の管理機関として事務局機能を有し、拠点校を支援した。
- ・県福祉局、県社会福祉協議会担当者を事業運営委員に依頼して、福祉系高等学校で行われている学びに理解を深めてもらうことができた。
- ・教育委員会と知事部局が連携を深め、県全体で産業人材を育成していくことの必要性を実感した。次年度以降につなげていきたい。

4. 現時点の状況

拠点校における以下の数値について記入すること（拠点校ごとに記載）

拠点校名	愛知県立古知野高等学校
① コンソーシアム（産業界、自治体など複数で構成される人材育成を目的に含む団体）の数	0
② 産学連携コーディネーターの数	<u>1</u>
③ 人材育成に関わっている企業等の数	<u>11</u>
④ 人材育成に関わっている企業等人材の人数	<u>12</u>
⑤ 企業等の人材が行う授業の数	一人で担当：0 一部を担当：0 教員と T.T： <u>5</u>
⑥ インターンシップ	社会福祉施設数：31 施設 平均期間：17 日 (1年生：9日、2年生19日、3年生24日) <u>参加生徒数：105名</u> <u>(1年生：37名、2年生32名、3年生36名)</u>